

---

# 月語り - 花の章-

小春

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

月語り -花の章-

### 【NZコード】

NZ405Z

### 【作者名】

小春

### 【あらすじ】

異世界平安絵巻。主人公、加賀美は大納言の六の姫として生まれるが、母の身分が低い為、神官の元に預けられ、父と大納言が他界した後、巫女となる。加賀美は他人にはない能力を、持っていた。加賀美をいつも守ってくれる、渡り、従兄の継俊と共に、呪術師の真部人麻呂に立ち向かう。ちょうどその頃、都では月の姫という得体のしれない姫に、貴族の男君が求婚しては、無理難題を押し付けられ、臥せる者まで出ていた。町の衆では、土壌修理の九、屍運びの蓮などに出会い。加賀美と渡り、継俊の三人の心の動き、触れそ

うで触れない微妙な関係。蓮の初恋のような、でも、まだ恋までいかない感情。登場人物の心が、事件と共に動く。

## 序（前書き）

不備な点、書を改えました。よろしくお願い致します。

## 序

なぜ、こんなにも胸騒ぎがするのか。  
今宵の満月のせいなのか、それとも。

そこまで思考を巡らしたとき、風が動いた。

風は吹くものだとは限らない。

人間の気配を感じるとき、風は動く。  
彼女は振り返りもせず、呟くよつて言つた。

「どうしました、渡り<sup>わた</sup>」

それが例え喰かれたものであつても、月明かりが届かぬ茂みに向かつて放たれたことは、その男にはわかつたのであつた。

茂みの中から、若く凜々しい男が現れた。

二十代半ばを少し越しているであろうか、肩まである髪は一つに束ねられ、薄い緑色の単に、それより少し濃い緑色の小袴を身につけていた。

渡りと呼ばれたその男は、音も無く、すっと縁側のぼづく近づき、縁側の下で、片膝をつき頭を垂れた。

平安の都の夜は深く、ゆつたりと時が流れる。  
灯りは月明かりのみ。  
幻想的な夜である。

神を祭る祭壇の前に座っていたその女は、静かに立ち上がった。落ち着いて見えるが、歳は、十七・八といったところか。白の単に緋色の袴をはき、月明かりに照らされた豊かな黒髪は、例えようもない光を放っていた。

巫女の姿に美しい顔立ち。

そして、その黒い瞳は遠くをしつかりと見据え、その意志の強さを物語つていた。

彼女は几帳の前で、また座つた。

「そこでは、遠い、近くへ」

それを聞き、渡りは音も無く板の間へと上がり、几帳の前で先ほどと同じ姿勢で片膝をついた。

一人は几帳を挟んで向かい合つ。

「都の様子は、変わりありませんか？」

その小さく放たれた声は、確実に渡りの耳へ届く。

「もう、姫などではない。わたくしは、神にお仕えする」としたのです

少々、きつい口調だった。

何かを振り切ろうとしているように聞こえる。

渡りは「はい」と短く答えた。

もう十年くらい前になる。

ちょうど、庭一面に桃の花がさいていた。

姫と呼ばれた、加賀美の母が亡くなつた。

大納言のお渡りを待ち焦がれつつ、病で亡くなつた。

加賀美は大納言の六の姫であり、正妻の姫ではない。

母の実家は貴族とはいえ、低い階級の家柄で、加賀美を引き取らなかつた。

そのため、正妻の実家に遠慮した大納言はこの屋敷で神官をしていた者に、姫を預けた。

そして、いつか自分の出世の為、富中へ出仕させるつもりであつたらしいのだが、その大納言も一昨年の流行り病でこの世を去つた。

現在は正妻の兄が家を継いでいる。

富中への出仕の誘いもあつたのだが、加賀美はそれを了承しなかつた。

そればかりか、父が亡くなつてすぐに巫女となり、神に仕えることにしたのだった。

巫女になる決心をするには、富中への出仕の拒否、そして、もう一つ理由があつた。

彼女には他人には無い、ある能力があつた。

決して、自らそれを望まなくとも、様々なものが見え、聴こえる。

一時はそれに振り回され、物の怪にとり憑かれたのではないかと、憔悴したことがあつた。

しかし、巫女となり、少しあその能力を操ることができるようになつた。

その能力は悲しいことすら、彼女にわからせる。容赦はなかつた。

大納言が亡くなつて間もなくのことである。

ある日、出かける神官を見送つたとき、なぜか、「もつお帰りにはなるまい」と悟つた。

「お気をつけて」という声がすでに震えていた。

涙が止まらなかつた。

やはり、出かけられた先で、突然お倒れになり、帰らぬ人となられた。

その後も、失せ物や病氣の見立てなど、相手を見たとき、様々なものが見える。

しかし、そのようなことが兄に知れば、どのようなことになるか。

身分制度の厳しいこの時代に、呪術師まがいの者がいるとなれば、恥となるつ。

だから、加賀美は自分の能力をあまり他人には、知られたくないなかつた。

そんな中、彼女の能力を理解し、貴族の争いから彼女を守つてきたのは、亡くなられた神官と神官に仕えていた、下働きの渡りだつた。



一月ほど前、加賀美には不思議な声が聞こえた。それは、もうすぐある一人の姫が現れるという。この名は「月の姫」詳細はわからぬ。加賀美としてはその兆候がないか、都の様子を渡りに調べさせたというわけだ。

「宮中も今のところかわった様子はないようです。継俊（へいしゅん）さまに文で確かめています。わたくしの取越し苦労であればよいのだけれど」

継俊は父方の従兄にあたる人物で、彼とは幼い頃から仲が良かつた。彼もまた、加賀美の能力を知つていて、彼女の味方だった。

「この満月を見ていると、わたくしは不安になる。月の姫とはどのような姫であろうか。近頃の貴族のありようを考えると、気持ちが重くなる。私利私欲に走る者も多く、民は苦しんでいる。月の姫とは……」

「あまりお考えにならないほうが。加賀美さまのお味方はありますゆえ、ご安心なさいませ。都が那良（なら）より遷都されて二十年、まだまだ庶民の暮らしは困窮致しております。貴族の方々のお振る舞いも目に余るもののがござります。しかし、それは帝もお気つきのことと思ひます」

そこまで語つたとき渡りは、はつとした。

少し、口が過ぎたと思ったのだ。帝、という言葉を身分の低い者が口にするなど到底考えられなかつた。

しかし加賀美はそんなことなど氣にもかけず、

「ありがとう。わたくしがこれではいけませんね。時は来ましょ。」  
ゆっくりと待つことに対し、  
と冷静に語った。

富中にいれば庶民の暮らしなどわかりはしない。

加賀美はたまに都に出て、庶民の暮らしを見ていた。

貴族の横暴な姿や役人の強かな振る舞い、それに苦しめられる庶民の暮らし。

自分にはどうすることもできないのだが、それでも気になってしまつ。

几帳が風に揺れる。

風が重い空気を運んでいったようだつた。

「それより、たまにはお忍びで都の裏の様子でも見にいきませんか。この渡りがご案内いたします。」

「まあ、珍しい。渡りから誘うなんて。何かわたくしに見せたいものがあるのね」

加賀美の声が軽やかになつた。先ほどまでの、あの夜を滑るような声とは違つっていた。

「姫さまには叶いません」

渡りも少しあどけたように笑みを浮かべる。

例え几帳越しでもその様子は、加賀美には手に取るよつてわかつた。

渡りのほうも、それは重々、承知の上だ。

都の外れ、その男の粗末な小袴は見るも無残に汚れていた。

歳の頃は十五、六といったところだろうか。ばさばさになつた髪は一つに束ねられてはいるものの、それが返つて薄汚れてみえた。

何をしているのか、まともな仕事をしているようにはみえない。目は獲物でも追つているかのように、ぎらりと光っていた。

都はここ二年続いた飢饉のため、餓死者や浮浪者を多く抱えていた。中心部は貴族たちが牛車を動かすため役人を使って排除していくが、中心地から少し離れたところでは、屍<sup>しかばね</sup>や浮浪者がいたるところにいたのである。

この男はその屍を捜しているところだつた。

役人は目立つところの屍しか運ばない。

そのため、この男のように屍を捜しては運び、その報酬を得る者がいた。

彼は屍運びの蓮<sup>しかばねはし</sup>といつた。

このあたりじゃあ、ちょっととは知れた男だった。

「ちえつ、なんでえ、生きてやがる。死んだらすぐに運んでやるからな」

野草や山菜を売っている女の横でじっとして座っている老人の顔を覗き込み、蓮は言葉を吐きかけた。

横にいた女はぎょっとした目で、蓮を見た。

「なんでえ、なんでえ、おいらがよつぱり酷い」としてゐみたいじやねえか。おいらはよ、ちゃんとあの世つてといろく行けるよう、屍置き場に連れてつてやろうつてんだ。あそこじやあ、三日に一度は坊主らしき奴がきて、加羅渡りの經とやらを唱えるんだ。ありがてえ話だよ。經とやらを聞くと極楽つてえとこ行けるらしいぜ」

蓮は自慢げに話した。

野草売りの女は聞こえないふりをして、目を逸らす。

このあたりじや蓮は乱暴者の札つきで通つてゐる。関わるとろくでもないことになるのは、目にみえている。

坊主だつて役人に頼まれて経を唱えるわけではない。

もともと國家を纏めるため、加羅の國より取り入れた宗教だ。気の利いた身分の高い者は仏教の教えを学び、高級な役職に就き寺などを与えられ庶民を先導してきた。当然それに反発し本当の教えを説こうとする者もいるわけで、報酬などとは別に人を助けようと修行僧となり、経を唱える。貴族や役人は報酬など「えはしない。貴族たちにとつて死んだ人間など、どうでもよいのだ。死んだ人間からは何も取れはしない。

仕方がないので屍を片付けた蓮たちに、ほんの一握りの粟や稗を

やる。そうすることにより都の清掃を行い、少しでも疫病が増えるのを阻止したかった。

蓮たちは蓮たちでそれを生業とし、その微々たる報酬で生計を立てていた。

「ふんっ、どうせおいら達は人間のうちにに入つてねえよ。お偉い奴だけが得をする世の中だよ」

蓮は不平不満を撒き散らしながら、小石を思いつきり蹴った。その小石は歩いていた少女の足を直撃した。普通の人間が蹴ったものではない。ましてや蓮が怒りを込めて蹴った石だ。当たれば痛い違いない。だが、運の悪いことに当たってしまった。

少女は「痛いっ、」と言ひて足を抱えてその場に座りこんだ。

「……ああ、今日はどうしてこいつ間が悪いんだ」

蓮は吐き捨てるよつて言つた。  
そしてその娘に駆け寄る。

「……大丈夫かい？」

娘は涙を堪えて頷いた。

「悪かつたな」

蓮が娘の足をみると、そう酷い傷ではなかつたが血が出ていた。  
蓮は横の野草売りの女を睨みつけた。

「何か、拭いてやるものを持ってねえか？おいらの小袖じゅあ汚れて傷の手当にもならねえや  
脅しつけた。」

野草売りの女はやうこいつなどない、後ろにある籠の中から一枚の布を取り出した。

「ありがとよ

そう言つて蓮は娘の足の手当をしてやつた。

この頃、布は貴重なもので庶民は自分の衣を持つのがやつとだつた。ましてや染めた布で出来た衣などは貴族しか着ることはなかつた。

「よし、できたぞ。もういいだろ、早くあつちへ行きな」

蓮は片手を振り、娘を追い立てる。

しかし、娘はそこを動こうとはしない。

着物は古く粗末な小袖ではあつたが、汚れではない。

顔はきりつとして、気が強そうだ。

蓮は自分とあまり歳は違わないと思つた。

「どうしたんだい、あるけねえのかい?」

娘は首を横に振つた。

「なにか言わねえと。わかんねえよ」

蓮の言葉にその娘は大きな声で言つた。

「わたし、そこのお爺さんを連れて帰りたい

蓮は面食らつた。

「ほつといても、もつじき死んじまつんだぜ。おめえの爺さんかい?」

娘はまた首を横に振り、

「わたしは、真照寺しんじょうじという寺にいるのですが、そこの尼様に育てられました。今、尼様は死にかけている人を連れてきては、穏やかな気持ちでの世へ行けるよう、体を拭いてやり手を握り、経を唱えてやるのです。なので、そのお爺さんを連れて帰りたいのです」

蓮は鼻で笑つた。

「おれは、屍しかばねか運ばないんだ。あの爺さんはまだ生きてやがる。第一、その尼さんとは商売敵だぜ。その寺に運べば、おれの稼ぎは減るんだ。なんで、おれが損すようなこと、しなきゃなんねんだ。おれは、その爺さんが死ぬのを楽しみに待ってる奴だ」

それを聞いて、氣の強そうなその娘はそれを押し殺すように、涙を流してみせた。

「……でも、わたしには運べません。足も怪我をいたしておりますし……」

娘は蓮に手当てをしてもらつた足を痛々しそうに撫でた。

「……わかつたよ、運べばいいんだろ？」

とんでもない娘に関わったものだと思つた。

あんな氣の強そうな娘が涙なんて流すはずもなく、傷だつてそんなに深くはない。ほんのかすり傷だ。優しくなんてしなければよかつたと蓮は後悔した。

蓮はあたりを見渡した。屍を運ぶための板に小さな木の車をつけた道具は持つっていた。しかし、生きた人間を運ぶとあれば、話は別だ。死体は少々傷をつけても文句は言わない。ところが、生きた人間となれば、引き摺るわけにはいかない。

「ちえつ、面倒だな」

と、困つてゐるところだ、元気。

「兄貴、なにやつてんすか？」

「これまは小汚い、蓮より随分小さい男がやつてきた。歳も蓮より二、三歳下のようだ。

しかし、蓮のようなどげどげしかねを感じられない。

「おう、ちよつとこどりへ来やがつた」

蓮は嬉しそうに手を振った。なかなかいい。

「おめえ、この爺さん運ぶからよ、手伝ってくれねえか?」

その小男は爺さんの顔を覗き込むと、不思議そうに蓮を見ると、

「兄貴、この爺さんまだ、生きてやすぜ」

と悪気もなく、さらりと言つた。

「そんなこたあ、分かってるよ。ただ、このお嬢ちゃんが、その爺さんを連れて帰りたいんだよ」と蓮は呆れた様子だ。

「へえ、珍しい人もいるもんだ。いいっすよ。今日は仕事も終わってるし、兄貴に付き合つても」

そう言つて、その小男はひょいひょいとした様子で、鼻を擦つた。  
「じゃあ、話は早えや。おめえ、爺さんの足を持ちな。おれが頭のほうを抱える。いいな」

二人は爺さんをひょいと抱え、蓮が持つてきた板の上に乗せ、二人で抱えた。もう、餓死寸前の爺さんであつたから、体重など感じられない。かえつて、蓮が持つてきた板のほうが重いくらいだ。

「で、その何とかつて寺は何処にあるんだい? 案内しちよ」と蓮は娘に向かつて言つた。

「西のはずれにあります。」案内致します

娘はさつたと歩き出した。足が痛いようでは見えず、さつきまで

涙を流していたのが嘘のようだった。

「まったく、現金な野郎だぜ」

蓮は娘に聞こえるよう、わざと大きな声で言った。  
その娘を先頭に、頭のほうを抱える蓮、そして足のほうを小男と  
三人は縦に並んで歩き始めた。

「ところで兄貴、その娘さんは何て名なんですか？」

「おれも知らねえよ」

蓮のぶつきら棒な答え方に反応するように、娘は答えた。

「由衣です」

運び始める前とは違い、はつきり答えた。気の強さは隠せない。

「へえ、おいら九つきゅうてんです。九番目めに生まれたから九です。今、  
土壌修理屋じぶじょうりゅうやのおばばのところで世話になつてます。都の南のはずれ  
です。兄貴もそこにいるんですよ」

九というその小男は娘に向かって、大きな声で言った。いかにも  
人の良さそうな男である。

「へつ、九、人が良いのもいい加減にしといたほうがいい。あんまり人がいいのは馬鹿まづつてんだよ」  
蓮はふてくされたように言った。

九とは三年ほど前に会つた。人懐こい性格で、蓮を恐れることなく、本当の兄貴のように慕つてくる。今、九が言ったように住むところも無い蓮に土壌修理屋のおばばを紹介し、連れていったの九だ

つた。

九はそこで、職人をしている。

「いつもの兄貴じゃないですよ。だって、いつもだったら生きた爺さんなんか運ばないと思いやすぜ」

「まあな、それがどうしてか、こうなつちまいやがったのさ」

ふたりは他愛もない話をしながら、由衣という娘の後ろをついて行つた。その間、由衣は彼らの話に興味が無かつたのか、それともあえて話さなかつたのか、黙りこくつたままだつた。運んでいる爺さんのほうも当然といえば当然だが、何も言わず、目を瞑つたままでつた。

少し日が西へ傾きかける。

三人、いや、爺さんも含めて四人は夕陽へ向かつていつの間にか無言のまま、歩き続けた。

どのくらい歩いただろつか。いくら爺さんが軽くても、そろそろ二人とも手が疲れてきた。

「まだ、つかねえのかよ  
蓮が痺れをきたして言った。

「もうすぐです。ほら、あそこに竹薮が見えるでしょ。あそこにあら、あの寺です」

由衣は竹薮を指差した。夕陽が邪魔でよく見えなかつた。竹薮は見えるものの、肝心の寺らしき建物が見えない。

「よかつたつすね、兄貴。もう、おいら手が痺れて、足も痛くて、  
くたくただ」

九は前方をよく見もせずに言った。

「何、言つてやがるんだ。そんな寺なんかあるのかよ。夕陽が眩しくておいらにはよく、見えねんだが。おい、おめえ、物の怪じやねえだらうな」

由衣はくすりと笑つた。

「蓮つて、以外に臆病なんだ。本当に物の怪なんていふと思つてゐの？」

由衣にさう言われて、蓮は顔を赤くして、かつとなつた。

「馬鹿にするんじゃねえよ。物の怪が怖くて屍運びができるつかてんだ」

「そりゃ、そおっすね。蓮の兄貴には怖いものはありやせんよな」

九は眞面目に言つた。

蓮はこの娘に騙されていふよつた気がしたのだった。都のはずれといつても、寺までは相当遠い。なのに、娘が、それも一人で運ぼうとしていたのが、納得できなかつた。本当に物の怪ではないかと、蓮は柄にもなく疑つていた。

「いいです」

竹敷のところまで来たとき、由衣が静かに言つた。  
それは荒れ果ててはいたが、確かに寺だつた。

「まあ、由衣。何処に行つていたのですか」

寺の門を潜るなり、一人の尼が心配そうに由衣に声をかけた。

「申しわけありません。都でこのお爺さんが倒れていたので連れてきましたが、さいせいに西清尼さまは？」

由衣の言葉を聞いて、その中年の尼は爺さんに気づいたらしく、「奥にお連れしなさい」と由衣に言いつけ、すぐに西清尼を呼びに行つた。蓮と九は由衣に言われるまま爺さんを、奥へと運ぶ。

そこは、土間の上に筵が敷かれた簡素なところだった。すでに一人ほど、もう助からないであろう人間が横たわっていた。由衣の指示でその横に運んできた爺さんを筵の上に寝かせた。そして、爺さんの体を拭いてやるために湯を沸かしてくると言つて、由衣はその場を離れようとした。

「もう、いいだろ？　おいらたちは、帰るぜ」蓮は早くこの寺を立ち去りたかった。第一、蓮に人助けは似合わない。そのことは蓮自身が一番よくわかつていた。

「待つて、もうすぐ西清尼さまがいらっしゃるから。会つていいって。物の怪などではございませんから、ご安心を」由衣は蓮の心の内を見透かしたよつにからかうと、その場を去つた。

「兄貴、これは一本取られましたね」

九からも笑われ、よけい蓮は機嫌が悪くなつた。

そこへ西清尼とおぼしき尼が、先ほどの中年の尼に連れられてやつてきた。

西清尼は年老いた尼で、少し腰が曲がついていた。そして皺の寄つたその手には、粗末な数珠が握られていた。

「由衣がご迷惑をおかけ致しました。今日わたくしの使いを頼み、都に出したのですが、あの子ときたら、あなたがたにまでご迷惑をおかけしたようで」

「いえいえ、人の役に立つたのなら、おいら、迷惑なんてありません」

蓮より先に九が嬉しそうに答えた。

「おいらは、迷惑だがな」

蓮は面白くなさそうに、口を尖らせた。

「へんだろ？　もう死んでいくんだぜ。助かりもしねえ、そんな人間に何かしてやつて、あんたに何か得なことでもあるのかい？」

西清尼はその年老いた顔に、少し笑みを浮かべた。

「正直なかたですね。本当に死んでいく者は何もわからないのでしょうか？最後に見るものは何なのか、それを持つて極楽浄土へ旅立つとしたら……？」

そう言つと西清尼はしわがれた手で、蓮の手を握った。思わず、蓮は手を引っ込めた。

「幼い頃は皆、母に手を握られたものです」

「おいらは捨てられたよ。親の顔なんて見たこともねえよ」

西清尼はまた少し笑みを浮かべた。

「由衣もそうでした。皆、そのような者たちばかりです。でも、懸命に生きよつとしている。そして、その傍らで、死を迎えるよつしている者もいるのです。どんなに偉い貴族であつても、死は避けられません」

いかにも、尼の言ことせうなことだ。いつもの蓮ならば屁理屈の一つや二つ調子よく出でてくるのだが、どうもこの年老いた尼は苦手だ。調子が狂う。

「うえつ、いつもと違つぜ」と心中で蓮が毒づいたとき、九が尼に手を合わせながら、涙を流し始めた。

「おいら……うれしそうす……仏様だあ」

「九、おめえ本当にいい奴だな。でもおめえは単純すぎるんだよ」  
そう言いながら、九のあまりの感動に冷めた視線を送りながら、蓮は何だか釈然としないものを感じ、苛々した。

しかし、西清尼のほうはをして氣にした様子もなく、「もう、そろそろ日が暮れます。早くお帰りなさい。そしてまた、いつでもいらっしゃって下さー。」とやさしい笑顔で合唱した。

一人が、壇である土壙修理屋のおばばの家に辿り着いたのは、もう日がどつぶり暮れてからのことであった。なんとか月明かりを頼りに、家に辿り着いた。

「二人揃つて何やつてんかい？もう、おてんとう様は何処にもいやしなしよ。物の怪にでも喰われちまつたのかと思ったよ。ま、あんた達を喰うような物の怪なんていないだろうけどね。間違つて喰つたら、腹壊しちまうよ。」

そう言つておばばは豪快に笑つた。

「早く、夕飯、食べておくれよ。本当に、片付きやしないよ」

稗と粟に雑草ともつかないものが入つていて雑炊を、二人の前に出した。

おばばのところの職人は九以外は通いであったので、おばばの家の離れに住んでいるのは九と蓮の二人だけだった。

もともと土壙修理屋はおばばの旦那がやつていた仕事だったが、先の流行り病で、親方である旦那が亡くなり後の仕事を九たち職人を使って、おばばがやつているのである。おばばとはいっても、全体の髪は黒く、ところどころに白髪が混じっている程度だ。この時代、五十が近いとなれば、おばばと言われても仕方が無い。だが、本人はちつとも気にしていないようだ。むしろ、おばばと言われたほうが、迫がつくと思つてゐるらしい。たしかに、彼女には言いようの無い迫力がある。

九は出会つた娘のことや、寺の尼のことなど雑炊を口にかき込みながら、必死に話した。そして、話が終わるまでに、五杯の雑炊を腹に入れた。こんなに食べながらこれだけの話ができるのは、いろいろな人間を見てきたが、九しかないと蓮は呆れた。

蓮は黙つたまま、一杯食つた。

「お前たちが会つたその尼さん、近頃じゃあ評判だよ。死んじまつて経を唱えるのが普通だ。ところが、死ぬ前から極楽へ行けるんだって、最近じゃあ、その寺に寄付する者もいるくらいだ。でも、たくさん持つて行つても、少ししか受け取らないらしいんだ。だから、あの尼さんは本物だつて、みんな拝んでるよ」

「へえ、冗貴は物の怪だつて思つたらしいナゾ  
九はいつものひょうひょうとした様子で言つた。九は嘘がつけない。

「物の怪だつて？ 冗談じやないよ。本物の仏様だつて」  
おばばは胸を張つて言つた。おばばも九と同じで、嘘が嫌いで、正直者である。

おばばは一人が食べ終わるの見ると、茶碗をすぐ片付けた。

一人は離れへ行き、自分たちの寝床に入つた。九はすぐにいびきをかきはじめた。

しかし、蓮はなかなか寝つかれなかつた。今日会つた由衣という少女の顔、そして、自分が連れて行つた爺さんの姿、西清尼のしわがれた手、声、言葉、全てが脳裏に焼きつけられ、幾度寝返りをうつても寝つくことができない。それどころか、ますます、いろいろな事が頭の中を駆け巡る。今までに無いことだ。眠りが来ない。ようやく空が白みはじめたころ、蓮はやつとの思いで眠りについた。

それから数日後、都で聞き覚えのある声に呼び止められた。

「……蓮？」

蓮は振り向く。それは先日「」を使われた相手だった。

「……由衣か、また、何のようだい？　おれをまたここ使おうって  
魂胆じやねえだらうな」

「「」あこわつね、そんなんじゅなにってば。あんた、屍運んで稼いでるんだろ？　この前は悪かつたよ」

由衣は素直に謝った。その姿は「」の前の拗ねた印象とは、随分違っていた。

「それなら今日ま」「んなといひで向やつてるんだい？」

今日は用事をこいつかられそうもないの、蓮は由衣に安心して尋ねた。

「西清尼さまのお言についてで、そここの商人の家にお礼の文とあわせたお布施をお返しに来たの。」

「何だい？ その多すぎたお布施つてえのは。」

「そうでしょ、おかしいでしょ。西清尼さまは一回のお布施があり高額だと、多すぎたといってお返しになるのよ。」

由衣は不満そうに言った。そういえば、おばばも同じようなことを言つていた。

「でも、全部貰つておけばいいじゃねえか」

「あまり高額だと寺の活動に口出しされてはいけない、ところのよ。どうしても、つて時にお願いにしてからしげの」

「いろいろあるんだな。おいらは難しいことはよくわかんねえけど、仕方ねえな。尼さんがそう言つなり……それより、この先にまだたくさんの菜の花が咲いているところがあるんだが、見に行くかい？ あそこは他の奴には内緒の場所なんだ。まだ、九にも教えてねえんだ」

蓮はがらにもなく照れくわわうに言った。由衣はそんな蓮を見て「うん」とだけ領き思いの外、素直だった。由衣は蓮の後ろをついて行く。蓮の秘密の場所まで無言で歩いた。女の子と歩いたことのない蓮はないをしゃべつていいのかさっぱりわからなかつた。

由衣は由衣で誰かに見られてはいいかと、蓮から離れて歩いた。しばらく歩き、丘を登り詰めたとき、視界が広がつた。

そこには、黄色い敷物が一面に敷かれていた。由衣は思わず「す

「ごい！」と叫んだ。今まで見たことのない風景画がそこには広がっていた。

「すうじいだろ、初めて見たときおいらも驚いたんだ」蓮は恥ずかしそうではあるが、自慢げに言つた。たしかに、蓮の言つとおりすばらしい風景だった。由衣は菜の花の香りに包まれ、しばらくは夢見心地だった。

しかし、ずっと見ていてないと欲したとき、由衣は自分の中に全く別の感情が噴出すのを感じた。そして、闇を切つたように話はじめた。

「蓮、わたしね、一度でいいからいい着物を着て、良いもの食べて暮らしてみたい。どんな気持ちになるんだろう。わたし、親の顔なんてまともに知らない。西清尼さまに育てられたようなものだから。西清尼さまには生きるだけのものは与えて貰つてるし、それには感謝してる。でも、いつも何で生まれてきたんだろうって思うんだ。贅沢して暮らしている人もいれば、西清尼さまのように自分は満足な暮らしあわせ、周りのわたしたちだって、お腹すかしてる。不公平だよ」

由衣行き場のない思いを抱えて生きているのだと蓮は思う。蓮自身も似たような境遇だつたし、そのような子供たちは掃いて捨てるほどいた。誰もそんな子供たちに目を向ける余裕は大人にはなかつた。

その中で翻弄されながら、彼らは生きていた。といつより、それで生きていた。

「由衣、負けんなよ。どんなに苦しくたつて負けんなよ」蓮は、由衣に言いながら自分自身にも言い聞かせていた。  
由衣は大きく息を吸うと笑顔を見せた。

「蓮、気持ちいいね。久しぶりだよ。こんなに大きく息吸ったの」

「なに言つてんだ。空気吸うのは貴族もおいらたちもみんな一緒だ。吸わない奴は死んでんだよ。そいつらは、おいらが屍置き場に運んで稼ぎにするんだ」

蓮はそう言つて笑つた。由衣もつられて笑つた。

「由衣、お前はそやつて笑つてたほうがいい。生きてる気がするだろ、笑つてたほうがさ」

蓮の言葉に由衣は落ち着きを取り戻した。

蓮は春風が吹き抜けていくのを感じた。そして、春風は一人の思いを菜の花畠へと運ぶ。

ますます、春の暖かい日差しに暖められ、菜の花がほころんでいく。

一人はいつまでも菜の花を見ていた。

その日、加賀美は町の娘の格好をしていた。薄い桃色の小袖がとてもよく似合っていた。渡りが誘つてくれた、都へ出かける日だった。貴族の姫がこのような格好をして都へ出かけるなど、ありえない。世話をする女房には教えてはいるが、他の者には言わぬよう口止めしている。腹違ひの兄に知れるのは困る。近頃では、なにかと宮中への出仕を求めてくる。貴族の姫の出世とは宮中に上がり帝の女御になることだ。しかし、それもそう容易いことではないのだ。

今日のようなことが兄に知れれば、見張りの厳しい都から離れた

屋敷に移されるかもしない。

加賀美の一族は宮中では第一勢力といつたところだろうか。現在の帝の母、皇太后様は不<sup>ふじわら</sup>一原の姫であり、まだ、后を持たない帝になにかと不<sup>ふじわら</sup>一原の姫を推挙したがる。ところが、帝はなかなか首を縊に振られぬ。さすがの皇太后様も手を妬いておられるとか。先の帝が崩御されて一年、皇太后様の権力は強まる一方で、その為か、帝はよけい母君のおつしやることを、お聞きにならない。加賀美の一族にしてみれば、助かつてているというものだ。この上、后が不<sup>ふじわら</sup>一原氏から出れば、その権勢はもう誰も止めることができなくなる。このような状況であるからして、兄の光則は尚のこと加賀美を出仕させたがるのだ。たとえ、后でないにしても、帝の皇子を授かれば格段に勢力は強まる。第一勢力とて、いつ覆されるかわかつたものではない。少しでも、自分の一族の姫を宮中に出仕させたいところなのだ。

兄の気持ちはわかるが、そうはしていられない。

「『用意はできましたか？』

几帳越しに渡りの声がする。

「ええ、行きましょう。とにかく、今日は何処へ案内してくれるの？」

「少々、面白い人物を『紹介したいと思いまして』

加賀美はにつこり笑った。神の前にいるときは別人のように普通の姫だった。

「あなたが面白いといつのなら、かなり変わった人物ね。楽しみだ

わ

渡りは苦笑いをした。

「わたくしの婆様の知り合いで、土壙修理屋のおばばというものが  
おります。そのおばばはよく都の様子を知り尽くし、しかも……」

「正直」と一人の声は揃えたように響いた。

「姫さま……」

渡りには見透かされたようでたじろいだ。

「とも、元氣のよさやつなおばば様ね。正直で強くて。だって、  
正直な人は強いのよ」

加賀美はいつになく、楽しそうだった。

二人は庭の隅から裏門のほうへと抜け、町へと出て行つた。  
都の中心部は活氣づいていた。那羅より遷都三十年。都には商人  
が集まり、布や食料、茶碗や瓶、異国の品物など様々なものを売つ  
たり、買つたりしていた。広場では踊りを披露する者や笛を吹いて  
聞かせる者、都には笑いや人の話し声が満ち溢れていた。それは光  
輝く光景であつた。しかし、それがほんの一部の人々であることも  
加賀美は重々承知していた。

しばらく歩くと加賀美は空を見上げた。

「いかが致しました?」

渡りは加賀美の視線の先を見た。

そこには地上からまっすぐ上にのびてゐる白い雲があつた。

「あの雲、龍です。地龍が動いている」

聞き慣れない言葉に渡りは首を傾げる。

「龍は地上の龍と地下の龍がいるものです。普段わたくしたちが見  
る龍は地上の龍です。地下の龍は地下深く眠つてゐるもの、それが  
動くなれば何か大きな力が動いているのかもしれません」

心配そうに伺う渡りを見て、加賀美は微笑んだ。

「大丈夫ですよ。まだ、そう深刻な状況ではありません。ただ、気  
をつけておきましょ」

だが、そう言つたときの加賀美はきつい表情になつてゐた。

賑やかな中心部を抜け、渡りは都の南へと加賀美を案内する。少  
しづつ店も減り、道の端で蓮を広げ  
野菜や干物を売つてゐる。その傍らには浮浪者が寝ていたりもある  
目を背けたくなるような光景だ。

「……待てえ、ど、泥棒だ、捕まえてくれー」

向こうから棒を振りかざし中年の男が、まだ七、八オくらいの男の子を追いかけてくる。

「……渡り、……」

加賀美は渡りに何か言おうとしたが、横から出て来た男の罵声にかき消された。

「何でえ、何でえ、いい大人がよ、子供相手に大声出して。」  
目つきの悪い狼のような男だった。男は子供を抱き抱えた。  
その男を見て、追いかけてきた男の顔色がかわった。

「……うわあ蓮。……だがな、泥棒は許さねえぞ。いくら蓮でも泥棒の片棒担いだとあつては、役人に引き渡すぞ」

男は恐々、一步下がつて叫んだ。

加賀美はそれを見ていられなくなつた。

「わたしがその品物の代金をお支払いいたしましょう

蓮といわれたその男は、加賀美をぎろりと睨みつけた。

「よけいな口出しあして欲しくないね。貧乏人だつたら泣いて喜ぶ  
とでも思つていやがる。施しはいらねえよ」

と言つと、子供が握っていた干物をその手から奪うと遠くへ放り投げ、抱えていた子供を下ろした。そして「早く行け」と叫んだ。子供は蓮が下ろすと遠くに落ちている干物を拾い、走り去つた。

「落つこちてるもの拾つたんだ。盗んじやねえよ」

蓮は平然と言つと空を見上げて笑つた。

「この野郎、なんてことするんだ。無茶苦茶だ、今度こんなこと

しゃがつたら、ただじゅおかねえからな

と男はすて台詞を吐き、そのへんに落ちている小石を蹴つて走り散らしながら、その場を立ち去った。

「ざまをみる、あんまりケチケチしてやがるから」蓮に命づけだよ」

蓮はその男の後姿に吐きかけた。

そして、加賀美のほうを振り向くと

「よけいな事すんなよ。どこから来たか知らねえが、この辺りの者じゃねえな。この辺りには、この辺りのやり方があるんだ。施しするんじやあねえよ」

「そんなつもりはありません。あの子を役人に引き渡すといつからです」

加賀美はきつぱり言った。

「へんつ、結局、相手は引き下がつただろ？　あれでいいんだよ」

「でも、盗みはいません」

「おめえ、あの子たちがどんな所に住んでるのか知つて言つてんだろうな。盗まなきや生きていけねんだぜ。おいらだつてやつやつて稼いで大きくなつた。きれいごと言つたな」

加賀美には何も言えなかつた。

「行きましょう、おばばが待つております。」

渡りが強い口調でその場を制した。

「ここの辺りでおばばといえ、つちの土壌修理屋のおばばか？」

蓮は頭を搔きながら尋ねた。

「うひのつひ、あなた、おばば様の身内のかたですか？」

加賀美は驚き、大きな目を見開いた。

「まあな、離れに居候つてとこひだ」

蓮は平然と答えた。

「行きましょう。加賀美さま。わたくしがご案内致します」  
渡りは加賀美を促した。その様子を見て蓮は「ちえっ」と舌打ちをすると、何処かへ消えた。さつきまでの騒ぎが嘘のようになり、辺りは静かになつた。

渡りと暫く歩くと、壊れかけた土壙に囲まれた家についた。  
そこが土壙修理屋のおばばの家らしかつた。土壙修理が職業のようだが、自分の家の土壙は修理されることもなくぼろぼろだつた。  
渡りは裏口から、「おばば、おばば」と一、三度叫んだ。すると奥から五十くらいのまだ、おばばと呼ばれるには若い女が現れた。

「おう渡り、久し振りだね。あなたの婆様は元氣かい？」

おばばは見かけの通り声も老婆のものではなかつた。張りのある、それなりに若い女の声だつた。

「はつ、元氣です」

「よかつた。近頃、わたしの周りでは亡くなる人が多いんだよ。あんたの婆様には長生きして欲しいからね」

そういうと、加賀美のほうへ手をやつた。

「こちらだね、今日お連れすると言つていた姫様は」

「加賀美さまです」

渡りが紹介すると、おばばは深々とお辞儀をした。

「本当にお連れしてきたんだね、大丈夫なのかい？こんなといふく

お連れして

「おばあさま、わたくしがお会いしたいと申しました」

加賀美は静かに笑つた。

「こんなところじゃ何だから、上がってください。とはこのものの白湯しかありませんが」

おばばは一人を奥へ通した。といつても入り口から上がったすぐ上の部屋だ。日当たりが悪く、部屋の中はかび臭かった。しかし、その部屋に徳利に刺した菜の花が一輪咲いていた。

おばばが白湯を持ってくる。

「本当に、こんな白湯しかありません。姫さまにお出しするようなものは何もありません」

恐縮するおばばを見て、渡りが笑う。

「こつものおばばらしくないな。あまり硬くならないでくれ。おばばのいつも話が聞きたくて、加賀美さまをお連れしたのだから渡りの声は加賀美に落ち着きを伝えてくれる。

「ところで、わざと蓮とかいう男に会いましたが、おばばの家の離れにいるとか」

渡りも初耳らしく、その真相を確かめる。

「もつ、蓮に会いましたか。何か悪さでもしてしませんでしたか?」

渡りはそれには答えず、苦笑いをした。

「やせし」ところもあるつだけねえ、ほら、そこの菜の花も蓮が摘んできただよ

加賀美はもう一度、菜の花に手をやり、こいつ微笑んだ。

「九はどうしていますか?」

渡りが尋ねる。

「九はもうじき仕事から帰つてくるよ。相変わらず元気だよ。あんたによく懐いていたからね。最近じゃ、蓮のことを兄貴って呼んで、よく一人でいるよ」

「大丈夫ですか？ 蓮という男、少し危ないような気がします」

渡りのその言葉を聞いて、おばばは笑った。

「誰にでも、あんな時期はあるものだよ。あんたにも心当たりがあるだろう？」

おばばの問いに渡りは答えなかつた。

「なあに、もうじき蓮も落ち着くよ」

加賀美は、渡りもまた少年の頃は蓮のようであつたと渡りの婆様から聞いたことがあつた。

渡りの婆様は加賀美が預けられた屋敷の下働きに來ていた。渡りの婆様は女房たちが集まるまで、しばらく加賀美の身の回りの世話をしていた。

しばらく三人で他愛もない話をしていると、入り口のほうで九の話し声がした。

「九が帰つて來た。呼んでくるから待つていておくれ」

おばばはそう言い残し、九を呼びに行つた。しばらくすると、おばばは九と見慣れぬ中年の尼を連れて部屋へ戻つてきた。

「何だが、この尼様のお話、聞いてやつておくれよ

おばばは困つた顔をしてそう言つた。

「わたしは真遍寺の西清尼をまにお仕えいたしてあります巡徳と申

します。わたくしジモの寺に由衣といつ娘がおりますが、もつ三日も帰つてまいりません。西清尼さまが心配されておられるのですが、いまだ帰つてまいりません。先日、行き倒れのかたをこちらのかたが由衣と運んできたのを思い出しまして、お伺いした次第ですもともと白い顔をした尼なのだろうが、部屋が暗いせいもあって白を通り越し、青白く見える。随分、心配した様子だ。

「尼さま、おいらこの辺りの連中に聞いてみるよ」

九はこつこり笑うと尼の返事も聞かずに、部屋を飛び出していくた。

「おやまあ、九つたら元氣がいいねえ。仕事以外のことになると元氣が出るんだから。あのくらい仕事も熱心だといいんだけどねえ」とおばばは少々、呆れて言つた。それを聞いて、「申し訳ありません。ご迷惑をおかけ致します」

巡徳尼は丁寧にお辞儀をした。

「悪いねえ、何だか変なことを言ひあつたよつだ」

おばばは調子が悪そうに笑つた。

「何か言い残して行かなかつたのですか？」

加賀美が尋ねる。

「特別、何も。その日はいつもと同じでした。由衣がいないことに昼頃気付きました。でも、しっかりした子ですから、夕方には戻つてくると思っていたのですが、とうとうその日は帰つてきませんでした。今まで、帰つてこないことなどありませんでしたので、西清尼さまが大変」心配されて、方々、捜したのですが、どうとう見つかりませんでした」

「でも、よくここがわかりましたねえ」

加賀美は不思議そうに尋ねた。

「はい、お前だけは聞いておりましたから、蓮さんとおっしゃるかたのこと尋ねますと、すぐにわかりました」

それを聞いておばばは声を上げて笑った。

「蓮はよほど有名なんだね。それも、きっと悪のほうだね」

「そりや、たしかに」

渡りまで一緒に笑つた。

「加賀美さま、その娘は神隠しにでもあったのでしょうか？」

渡りの問いに加賀美はゆっくり首を振つた。

「巡徳さま、何か由衣さんの持ち物をお持ちではありませんか？」

しかし、巡徳は「いいえ」と答えた。

すると今度は「蓮、そこにいますね」と加賀美は振り返つた。皆も、加賀美の視線の先を見た。すると薄暗い部屋の柱の影から蓮が現れた。

「蓮、その菜の花は由衣さんが摘んだものでしょ？」

加賀美の問いに蓮は柱にもたれ掛かったまま、「ああ」と答えた。

「渡り、その花を花瓶のまま」「く」

渡りは加賀美に言われるまま、彼女の目の前に置いた。

加賀美は懐から金糸の縫い取りのある小さな袋を出し、その中から朱色の組紐の付いた小さな土鈴を取り出した。それをカラソカラソと一度ほど菜の花の上で振ると、今度は二回拍手を打ち小さな声で「神様、少々わたくしにお力を貸しください」と言って手を合させた。

皆が固唾を呑んで加賀美を見つめる。

暫くすると、加賀美はまた柏手を一回打つ。

「綺麗な着物を着ている姿が見えました。ただ、あまり楽しそうではありませんでした。でも、誰かに邪魔をされて、消されました。少々、厄介なことに巻き込まれいるかもしれません。ただ、今はまだ生きておられます。すぐに殺されることは無いとは思いますが」

渡り以外のその場に居合わせた者は驚いた様子だった。ただ、蓮は柱にもたれ掛かったままだった。

「生きているんだつたら、捜してみよつよ  
おばばは元氣よく言った。

「駄目ですよ、おばばさま。よく調べてみてからです。わたくしの邪魔をするくらいですから、悔ってはいけません」

加賀美は慎重な姿勢を示した。

## 7（後書き）

やつと加賀美が動きだしそうです。

「蓮、あなたもあまり動かないほうが多いですよ」

「うむせえよ、偉そうにわかつた口利きやがって。おめえみたいなを見てると反吐が出そうだぜ。これは、おれらの問題だ。何処ぞのお姫様には関係ねえよ、おれは好きにさせて貰うぜ」

蓮は悪態をつくと、その部屋を出て行つた。

それを見ていたおばばは、大きく溜息をついた。

「どうして、ああ捻くれちまつたのかねえ。蓮には何も通じないね」「おばば様、蓮は由衣さんなことがとても心配のようです。でも、とにかくよく調べてみます」

加賀美はやさしくおばばの肩に触れた。

それは硬く、働き者の肩だと加賀美は感じた。人の強さを感じる。きっと、蓮もこんなに硬く強い人物なのだろうと加賀美は思つた。

「渡り、お願ひします。調べてください」

渡りは加賀美の言葉に静かに頭を下げた。

その日、継俊は久し振りに加賀美の屋敷に立ち寄つた。

女房たちはいつものように少し警戒をして、神の祭壇のある部屋までしか彼を通さない。しかし、継俊は遠慮なく奥の加賀美の部屋へ御簾を潜り、勝手に入つていいく。

「やはり、ここは別世界だね。静かで時が止まつているようだよ。

あなたが巫女のお姿でなければ良いのだが

穏やかな微笑みを浮かべ、扇子で口を軽く押さえ加賀美の顔をじつと見る。

「どうなさったのですか？ 何かわたくしの顔についていますか？」

訝しがる加賀美などそっちのけで、あくまで自分のペースだ。

「いや、いつ見てもあなたはお美しいと思つて」

継俊は直衣姿に鳥帽子を着け、年は二十代半ばといったところか。顔は細面で凛々しく富中でも五本の指に入るほど女房たちに人気がある。彼女たちの憧れの的だ。しかし山のように文を貰つても、どの女人にも手を出さない。それが返つて噂を呼ぶ。

この時代、結婚の形式は男性が女性の所へ通う、通い婚であるが、継俊が一人の女性の所へ通い詰めているという噂は今のところ聞かない。正室はいるのだが病弱で子供も無く、正室の所へも通つていないう�なのだ。

「ところで先日、文でお願い致しました件ですが」

継俊の視線を振り払つように加賀美は尋ねる。

「呪術師の件ですね。今、一番と云われている呪術師があります。  
まなべのひとまいまなべのひとまいま  
真部人麻呂という呪術師です。まだ若いが、なかなかのものと聞き及びます」

「住まいなど、おわかりになられますか？」

「それが、少々調べましたがなかなかわかりません。兄上ならご存知かもしれませんが、わたくしが聞くのも如何なものかと」

たしかに、継俊は腹違いの兄、重利とはあまり仲が良くない。  
しげとじ  
加賀美も重利には関わりあいたくない。重利に館を用意しようかと言わされたことがあった。つまり、側室にということだ。歳も継俊

より十も上で、その上赤ら顔ときている。何よりも、中納言といつ

自分の地位を利用したがる。加賀美はそれが一番嫌だった。

兄の光則に頼んで丁重に断つたことがある。今でも時折、文をく

れることがある。

「そう……重利さま……」

加賀美は言葉に詰まつた。

「その件はもう少し他も当たつてみよう」

継俊は全てを知っているので、やさしく微笑んだ。先程まで口に当っていた扇子は懐に挿している。

「それより、もう少し他の話をしよう。なかなか加賀美とも会えないのだから。碁でも打ちましょうか、それとも双六でもやりましょうか。」

「……でも今はそれどころではありません。それより宮中では何か変わったことでもありますんか？」

「わたしはそんな話はちつとも楽しくないよ。でも、仕方がないね。あなたにはあまり聞かせたくはないが。いつも何を始めるか、どきどきさせられるからね」

「もつたいぶらずに、教えてください」

加賀美はにつこり微笑む。

「ああ、その顔、その顔。あなたのその顔が見たかったのですよ」  
愛しい恋人にでも語るように優しく言つ。

「まあね、帝にもようやくこの寵愛なさる姫が現れたのですよ。どちらの姫にも見向きもしなかつた帝に」

「どちらの姫ですか？」

継俊は少し困った顔をした。

「それが我が水元みなもと一族に少々縁はあるが、なにせ御父上も少将とお

身分が低い。しかし、帝はたいそうお気に召されて、片時もお放しにならぬ。ところが先日体調を崩され、あまりにもお苦しみになられるので、よつやく、お宿下がりのお許しが出たというのです。帝が泣く泣くお許しになられたとか

「初めて聞きました。不<sup>ふ</sup>一原の一族の姫を帝は嫌われておられると聞きましたので、宮中がどのようになつてているか心配でした。でも、良かった。いくら身分が低いとはいえ、皇子をお生みになれば、宮中の待遇も変わつてしまょ」

「でも、そう明るいことばかりでもないのですよ。体調を崩されたのも、誰かが呪詛したのではないかと、もっぱらの噂です。とすれば、皇太后様や不<sup>ふ</sup>一原の一族が疑われるわけです」

「どうこうことなのでしょう、呪詛などと恐れっこ」

加賀美は首を横に振った。

「その姫様の<sup>ご</sup>実家はどうぢらでしよう。わたくしのお見舞いにお伺い致しどうぞやります。」

「ほらきた、あなたはすぐ、そういう事に首を突っ込まれる。だから、教えてくなかったのですよ。お兄様がご心配なされますよ。お止しなさい」

継俊はいかにも恐ろしげに口を袖で押さえた。

「あら、継俊さまは気になりませんの？ 姉さまがどうのよつておられるか

「わたしはあなたが元氣であれば、問題はありません」

「……」

加賀美のほうがどう答えて良いものやら考えてしまう。だいたい

「この従兄はいつもこの調子だ。何処まで本当か嘘か判らない。

「どうしました？あなたらしくない。そこで、強引に聞き出そうとするのが、いつものあなたではありませんか。あなたの困った顔を見るのが、わたしは好きです」

「継俊さま、今日は変です」

「……ああ、こここの几帳の後ろに、どうせ渡りが控えているのでしよう？ つまらない、つまらない。あなたの袖にさえ触れる」ともできないではありませんか」

「からかわないで下さい。巫女の袖に触れても恋は始まりませんよ」

拗ねる加賀美を尻目に継俊は、はははと笑い飛ばした。

「意地悪はこのくらいにして、教えてあげましょう。この文に場所を書いてきました。わたしは、姫には何度もお会い致しておりますので、わたしの使いで来たと言えば良いでしょう。あなたも水元の一族ですから」

そう言つと加賀美にいつもの加羅渡りの継俊の香がする文を渡した。文箱に香と紙を一緒に入れておけば、香りの良い紙となる。

「やうやう、渡り。加賀美を頼みましたよ。この姫は危ない」とばかりするので心配です」

几帳の向こうから「はっ」と渡りの返事が聞こえた。

「やはり、そこに附ましたか」

継俊はまた、はははと笑い飛ばした。

やはり、どうでも本気かよく判らない男だと、凡帳の向ひつの渡りは思った。

帝の「龍愛の姫にお会いするのに、巫女や町娘の格好ではさすがに失礼だらうと、加賀美は合わせを重ねた。窮屈な姿は好ましくないがこの際、仕方がない。しかも馬に乗るわけもいかず、牛車を用意させた。女房たちは加賀美が着飾ることが少ないので、この日ばかりは、いつになく真剣であつた。

もうじき桜が咲き始める。加賀美は桜色を基調とした濃淡の着物を重ねた。まるで桜の花があたり一面を覆い尽くしてゐるようであった。

「まあ、なんてお美しい。姫さま、いつ宮中へ出仕なされても、他の姫様方には引けは取りません」

と一人の女房が言うと、もう一人の女房は田頭を押さえながら、「帝のお田に止まらなければ、継俊様でもよろしうござります」

「それは、少し、継俊様がお可哀相ですわ」

などと女房たちは思い思いの気持ちを述べた。

「……どうしてそこで継俊さままで出でてくるのかしら。とにかく窮屈だから早々に用事を片付ける」とと致しまじょ。ところど、渡りの用意ももうできてるのかしら。こつものまじや、供こはできませんよ」

「はい、支度はできておりますが。姫さま、供は渡り一人で宜しいのですか? 女房が一人もお供しないでは、面田が立ちません」

「そう仰々しく考えなくてよいよといひのよ。ちよつとお見舞いに伺いするだけですか?」

加賀美は心配顔の女房たちを屋敷に残し、正装した渡りを供に、牛車に乗り込んだ。

「渡り、屋敷の場所はわかりましたか？」

「大丈夫です。確認致しております」

渡りは牛を操りながら、短く答えた。

加賀美は牛車に乗るのが嫌いだ。馬に乗るほうがどれだけ楽しいか。亡くなつた神官は馬は神馬である、と言つて馬を大切に飼つており、神官自身もよく馬に乗つていた。その影響もあり、加賀美も神官の元では馬には乗つていた。

渡りは無言で牛車を進める。都の中心から少し外れた、大きいが古ぼけた屋敷の前で牛車を止めた。

「こちらのお屋敷です」

「この文を、屋敷の者に渡しなさい」

加賀美は牛車の簾を少し開け、隙間から文を出した。その文からは覚えのある良い香が立ち込めていた。

渡りはその文を取り次ぎの者に渡す。

しばらくすると取次ぎの男は戻つてきて、牛車を止めるところを指示し、案内の女房を呼んできた。

女房は加賀美の手を支え牛車から降ろすと、加賀美だけを奥の部屋へ通した。

「こちらでお待ちください」

そう告げ、また奥へと下がつていった。

部屋には加羅渡りの香がきつく焚かれていた。

加賀美は扇子を少し広げ、小声で  
「渡り、そこにいますか？」

と後ろの几帳に声を掛けた。

すると、「はつ」と低い声がした。

加賀美は安心した様子で扇子で口元を隠し、正面を向いて主人が来るのを待つた。

どのくらい時間が経つただろうか。しばらくして、案内の女房より年をとった女房が現れた。

「お待たせいたしました。中納言光則様のお妹君にお見舞い戴きまして、真亞<sup>まあ</sup>姫様も大変お喜びなのですが、お体の調子が思わしくなく、まだお会いできる状態ではございません。お見舞いのお品など戴き、ありがとうございました」

女房は丁寧に姫の非礼を述べると共に、品物のお礼も述べる。

「そうですか。わたくしのほうこそ突然のお見舞い、申し訳ございません。姫様に非礼をお詫び申し上げます」

加賀美も突然の非礼を詫びる。

「姫様はそんなにお悪いのですか？」

「だいぶ良くなつてきております。ご祈祷が効いたものと思ひます」  
この時代、病は祈祷で治療するのが通常であった。

「どちらの僧のご祈祷をお受けになられたのですか？」

加賀美はさらっと聞いた。しかし、それには乗つてこなかつた。

「わたくしにはわかりません。お父上様がお招きになられました」とだけその女房は答えた。

「そ、残念なことです。姫にお会いしようとしました。お大事になさつてくださいませ」

加賀美はにこりと笑つたが、手にしていた扇子をぽとりと落とす。

「あら、失礼いたしました」

加賀美はその扇子を拾つと、

「そうだわ、扇子を姫と交換いたしましょ、せつかくここまで来たのですから、お近づきの印に」

女房は警戒していたようだったが、「そのくらいでしたら」と加賀美の扇子を預かり部屋を出て行つた。几帳の裏の男はその女房に悟られぬよう一緒に部屋を出て行く。

加賀美が扇子を落とすのが合図だつた。

しばらくすると、女房は部屋に焚かれた香と同じ香りのする扇子を持つて戻ってきた。

「ほんらいが真亞姫さまのものです」

女房は加賀美に差し出す。

「ありがとうござります。姫様にくれぐれも宜しくお伝え下さい。また、近いうちにお会いできることがあります」

加賀美は意味ありげに言うと、その部屋を出た。

そして牛車に乗り込み渡りと共にその屋敷を出た。

屋敷を出ですぐの角を曲がつたとき、牛車は誰かにぶつかりそうになり大きく揺れた。

「危ないではないか」

渡りの声が大きく響いた。めったなことでは大きな声を出さない

渡りが、怒鳴った。

「つるせえ、急いでんだ」「これまた大きな声だ。」

「お前は、蓮……」

確かに蓮の声だった。聞き覚えがある。

「渡り、どうしたのですか？」

加賀美の声を聞いて蓮は叫んだ。

「また、そのつるとい姫様かよ。」

「へい、蓮。姫に何とこつ口の利き方だ」

「へん、どうしたんだい？ 渡り、今日はえらべすましゃがつて  
蓮は渡りを挑発するように馬鹿にして言つた。

それを聞いていた加賀美は牛車の中から簾越しに、静かに言つた。

「渡り、通りの真ん中では皆が迷惑ですよ。どこか田畠たぬといじ  
へ車を立てなさい。蓮、ついてきなさい」

「どうして、ついて行かなきゃなんねんだよ

「角を曲がったところの屋敷に用があるのでしょ？」  
加賀美の問いに蓮は驚いたようだった。

「どうしてそんな事、知つてんだ？」

加賀美は蓮の問いには答えなかつた。

渡りは静かに牛車を町の外れへと、導いていく。

蓮は仕方なさそうにその後ろをついて行く。

加賀美に見透かされたことが少々ショックだつたようだ。

9 (後書き)

蓮君、ここで何してたのでしょうか?

「「」の辺でいかがでしょう」「渡りは町から少し外れた、大きな木が立つ小高い丘の上で牛車を止めた。

加賀美は渡りに牛車の御簾を上げさせる。

蓮は加賀美を眩しそうに眺めた。まだ肌寒い空気は春の柔らかい日差しに、その透明感が増していた。その壊れそうな均衡は、加賀美の美しさを引き立たせていた。

「蓮、どうしたのですか？　何かあの屋敷に用事があるのですか」詰問といふ言葉がぴったり合つほど、口調がきつかつた。

「あんたには関係ねえだろ」「蓮は以前と変わらず反抗的だ。

「あの屋敷には近づかないほうがよろしいと思います。危険ですよ」

「偉そうに言いやがつて」

蓮は宙を見る。

しかし、加賀美は蓮の態度には構わず、今度は渡りに尋ねた。

「渡り、奥の部屋へは入れませんでしたね」

「はい、結界が張られており、あまり奥へは入れませんでした。それより姫さま、手が震えておいでですが」

「わかつています。この扇子にはとても強い術が掛かっています。

ですが、向こうもわたくしの扇子を手にして振るえていますよ。

加賀美はにこり笑う。

そして、懐から香り袋を取り出すとその中から震える手で、土鈴を出した。

拍手を一度打つと左に持つていた扇を広げ、右手で朱の組紐を持ち土鈴をからんからんと鳴らす。

すると、不思議なことに扇は見る見るひびき形が崩れ粉となり、風に吹かれ無くなってしまった。

渡りは「ほづ」と小さく頷いた。

ところが蓮のほづは腰が抜けた様子で、その場に座り込み脅えたよひこ「も、物の怪……」と口の中で唱えた。

その姿を見た加賀美は微笑んだ。

「今の扇子はあの屋敷から持ち帰ったものです。術が掛けられていました。今、それを浄化致しました。術とはあのよひなもので、この世の幻です」

「冗談じゃねえよ、そんな化け物みたいなのが、あの屋敷にいるってえのか？」

「そうです、だから聞いているのです。あの屋敷に何の用があつたのですか？」

加賀美はもう一度、蓮に同じ質問をした。今度は先程のよひについ尋ねなかたではなかった。

蓮は少し落ち着いたらしく、その場で胡坐をかき語り始めた。

「一日前のことだ。あの屋敷の女が、いつもおいらが見回っている町外れに立っていたんだ。その女はおいらが『何をやってんだ』と聞くと、『行き倒れのこの女を連れて帰りたい』と言つんだ。えつ、

またかよ、と思つたんだが、何となく断りにぐぐて……仕方ねえから運んだよ、九と二人で。またあの爺さんのときのようにならひみのきのうに

「その行き倒れの女はまだ生きていたのか？」

渡りのその質問には蓮はむつとしたようだつた。

「当たり前だろ、そうでなきや九は呼ばねえよ」

「そして、その女に、お礼に砂金をやると言われたのね」

加賀美のその言葉に蓮は顔色を失つた。

「なんで、そんなことが……」

「砂金の袋が見えるのです。でも、それを頂いたからこそ、今、あなたは悩んでいるのですね」

加賀美に見透かされて、蓮はすぐに言葉が出ない。  
暫くして、続けた。

「……ああ、じつは今日、いつもの屍置き場にその行き倒れの女の亡骸があつたんだ。それで、どうこうことなんか聞きに行くところだつた。たしかに、おいらは砂金に田が眩んだ。だが、あんなところに放り出されるくらいなら、真遍寺の尼さんのところへ連れて行くべきだつたよ」

「蓮、でもあなたはそのお金を自分の為に使つたわけではないでしょ」

「……ああ、あんたにはそんなことまでわかるのかよ。たしかにあの金で、この前あんたが助けようとした子供たちに食べ物を買ってやつたよ。可笑しいなら笑えよ。あんたが助けようとしたとき、お

いらはあんたに施しは止めると言つた。そのおいらが施しをやつて  
る。しかも、そのせいで助かるかもしれない女を殺したのかもしれ  
ねえんだ。いや、少なくともあの寺で死なせてやつたほうが、どの  
くらい

幸せだつたしれない。おいらが、悪かったよ」

「蓮、あなたはそのやさしい気持ちに付け込まれたのですよ」

加賀美の言葉に蓮はだまりこくつた。

蓮の話が終わり、暫くして「この件、姫はどう思われますか」と  
渡りは加賀美の考えを尋ねる。

蓮はいろいろ驚いたらしく、なかなか立ち上がりうとしない。そ  
のまま、座り込んだままだ。

「蓮、どのみちあの屋敷へ行つても本当のことなど教えるはずはあ  
りません。ここで会えて良かつたのですよ、あなたの命まで危ない  
ところでした。術とは恐ろしいものです。あの扇子のよう人にでさ  
え幻にしてしまつ……渡り、帰つたら文を書きます。継俊さまに届  
けて下さい。わたしの読みが正しいなら、真亞姫は近いうち、宮中  
へ戻るはずです。蓮、このこと、わたくしに任せください」

加賀美はいつものように微笑む。

相変わらず、のんびりしたものだと蓮は思つ。

ところが、渡りの次の言葉に蓮は敏感に反応した。

「じばらぐ、大人しくしていろ。お前の手に負えることではない」  
渡りはにたりと笑う。

「うるせえ、お前には言われたくないぜ」

そう言い放つと蓮は元気よく立ち上がり、すぐさまその姿を消した。  
さつきまでの脅えた姿が嘘のようだった。

「渡り、あまりからかうものではありますよ」

「なあに、姫さま、あの男なら決して懲りたりは致しません  
渡りはある意味、蓮を認めているようだった。」

「そうですね、やはり蓮は蓮のままですね。現し世<sup>ひつよ</sup>とて幻のような  
もの。わたくしたちとて、この身体から魂が離れれば夢か幻です。  
精一杯、蓮のように生きることと致しましょう」

まだ桜が蕾ばかりの、肌寒い午後のことであった。

その日の夜、加賀美の文を読み継俊は彼女の部屋を訪ねていた。女房たちは相変わらず継俊を神の祭壇のある部屋へ通す。しかし、彼はいつものように奥の部屋へ勝手に入つて行く。

加賀美は現れた継俊に驚くこともなく、今日の出来事を全て話した。

話を聞き終えると継俊は不思議そうに尋ねる。

「だが、どうして近づいてから真亞姫様が面中へ戻ると思つのですか？」

継俊の中では話が上手く繋がらないようである。

「今の真亞姫様では、きっと『懷妊は無い』と思つのです。呪術師がどのような術を掛けたかは真亞姫様にお会いしてからでなくては、はつきりと申せませんが、目的は『懷妊なさうな』によつてあることだと思つのです」

「つまり不一原氏にその呪術師は詮じられてやつてこぬと言つただの事でしたね」

「不一原氏だとは断定できませんが」

「ね」

継俊は笑みを浮かべる。

加賀美は小首を傾げ、不思議そうに継俊を見る。

「どうなさいましたの？」

「こえ、こつになく慎重だな、と」

「やうではないのです。どうしても、あれだけの呪術師が簡単に物事を運ぶものかと。わたくしたちでなくとも、すぐに不二原氏ではないのかと思います」

「えりく、その呪術師に『執心だね』

継俊はまた笑みを浮かべる。

「最近、継俊さまはへんです」

加賀美は困った顔をした。

「やう、自分でも困っている。あなたきたら、わたしのことなどそっちのけで、呪術師だの何だと。わたしはあなたに恋をしているんですよ。わかつて欲しいものだ」

継俊はわざとらしく拗ねてみせる。

「どうして、そつなのですか？ どじままで本気なのか、いつも困っています」

「こつも本氣だよ。あなたが本氣でないだけです。鳥が羽を重ねるようになないと袖を朝まで重ねていたいものだ」

加賀美は継俊の言葉に困惑する。

しかし、その手は嘘ではなくやはり本氣のようだ。  
気まぐい空気が流れる。

「何もしないから、渡りが見ている。心配はないよ」

継俊は声を上げて笑う。

「それより真亜姫様にお会いなさい、富中へ出仕なさるとこ。あ

なたのお姉さまの三の姫様に会いに行くと言えば良いのです」

加賀美の母違いの姉の三の姫は女房として宮中へ出仕していた。

「たしかに、それは良い方法だと思います」

「そう、それからもう少しすれば、宮中で花の宴が催される。宮中の桜は格別ですよ。そこで、姫、神楽を舞つて下さい。あなたの神樂は美しい。ぜひ、そうなさい。楽しみだね、今年の花の宴は」

「勝手に決めないで下さい。わたくしはそんなことは致しません」  
加賀美は突然の継俊の思いつきに、たじろいだ。

「いや、なさるべきだ。本当に真垂姫様が術に掛かつておいでであれば、あなたの神樂は見ていられない筈。帝をそのような姫と一緒にしておくわけには臣下としては参りませんよ」

計算をしているのか、していなかの判断がつかないところだ。  
しかし継俊の硬い表情を見れば、公人として臣下として帝を案じているらしかった。

「あつ、それより、今田はあなたに耳寄りの話を持つてきたのだった」

継俊の表情はいつもの穏やかなものになっていた。  
「近頃、町ではある姫が人気だとか、姫に求婚する貴族が後を絶たぬとか」

「どうこう」とですか？」

「竹取の翁という者に育てられた、それはそれは美しい姫がおられ

るところのです。身分が低いからと貴族の男君の求婚をお断りになるですが、そこがまた、男心をくすぐるのでしきう。ですが、誰にもなびくことがないのです。それどころか、あまりしつこく求婚すれば、無理難題を仰せ付けられ、果ては病に臥せる者までいるとか

「姫の名は……？」

「姫の名は、月の姫」

「……月の……姫……」

加賀美の尋常でない様子を見て、継俊のほほがうろたえる。継俊は加賀美的手をやさしく握った。

ちよつと、その瞬間、几帳の後ろで控えていた渡りが思わず出てきてしまった。

継俊と田が合った渡りは「しまつた」という表情を浮かべた。

「申し訳ありません  
渡りは深々と頭を下げた。

「駄目だよ、居ることはわかっているのだよ。でも、出てきて欲しいはないね」

継俊の口調はいつになく厳しいものであった。

渡りは戸惑っていた。たとえ継俊がどんな行動に出ようと、自分は出るつもりはなかった。自分が邪魔になるようであれば、部屋をでるつもりでいた。

けつして、継俊の邪魔をしようと思っていたのではない、と自分に言い聞かせる。

「継俊さま、違うのです。渡りを責めないで下さい。月の姫という名を聞いて思わず出て來たのです。月の姫の正体はわかりません。しかし、何か良くないことが起ころうとしているのは確かです。わたくしにはわかるのです。それは呪術師などではなく、もつと、そういう、人間よりもっと大きな力を有する存在。わたくしなど、及びもしない大きな存在……神のような……」

その姿は、いつも冷静な加賀美からは想像もできなかつた。何かに怯え慄き、その身を小刻みに震わせていた。

「悪いが渡り、出て行つてくれぬか。決して姫に手は出さぬ。だから、姫とこのままにしておいておくれ。震える姫を抱いてやりたいのだよ」

渡りは何も言わず、跪き頭を垂れるとその場を静かに去つた。

継俊の気持ちがわかつてゐるからこそ、彼は几帳の後ろに隠れ加賀美を見守つていた。

加賀美はそんな渡りがいるからこそ、安心して継俊と会つことができた。

そして、そこにはいつも動搖している渡りがいた。

程よく取れた三人の気持ちの均衡が、ほんの少しだけ、崩れたのだろうか。三人の気持ちはまるで絹織物のように織り重ねられていった。どんなに細くとも一本でも間違えば、織物として成り立たない、纖細なものだつた。

継俊は、しばらく加賀美の肩を抱く。

「悪いことをした。渡りには謝つていた、と伝えておくれ。やはり、あなたが言つのようにわたしあはづかしている

そう言つと加賀美の肩を抱く手に、力が入る。

「申し訳ございません。わたくしが皆を不快な気持ちにしてしまいました」

加賀美はまだ、震えが止まらない。

「とにかく、月の姫のことはよくわかった。わたくしが行つてみよ、  
その姫のところへは」

「駄目です、継俊さまお一人では危険です。わたくしがお供致します」

「……わかつた、そのときはあなたに供を頼もう。だが、その前に  
宮中へ出仕しておくれ。真亞姫のことが先だよ」

継俊のやさしさが、加賀美は怖かった。彼が優しければ優しいほど、加賀美は甘え、流されていくようを感じる。

その加賀美の気持ちを渡りが止めていてくれたのかもしれない。

「もう大丈夫です。震えは止まりました。真亞姫様が宮中へ戻つたら文を下さい。宮中へ出仕致します」

継俊は加賀美をそつと、その手から離した。

「わかつたよ、宮中であなたのところへ会いに行こう。あなたこそ、  
危険なことをなさらぬよう

「ひよ」

継俊は加賀美に念を押すと、その夜は帰つて行つた。  
夜は随分更けていた。

まるで妻のところへ通う男君のよう、継俊はみえるだろう。し

かし、彼の胸中はその男君たちのよひ、華やいだものではなかつた。

そして、渡りもその夜は複雑な思いを抱いていた。

一日後、継俊から文が来た。真亞姫が富中へ戻つて來たという内容であった。

その中に、姫は以前とは違ひ口数が少なくなり、塞ぎがちであると記されていた。

加賀美は翌日には支度を整え、富中へと上がつた。その姿は真亞姫の見舞いに行つた時より重ねを増やし、まるで陽だまりの中で桜の花弁が舞つているかのようであつた。

供の中に渡りの姿はあるが、継俊の会つた夜からあまり話をしていない。やはり氣まずい思いが両者にはあつた。

富中へ参内すると加賀美は姉である三の姫の元を訪れた。  
三の姫は少ししぶくよかな女性で、性格は温厚で皆に好かれていた。  
顔立ちも穂やかで、三の姫の笑顔を見ていると心が和むのである。

「まあ六の姫、お美しくなれで。わたくしもあなたのように、すうりとしていれば、もっと殿方から文が戴けますのに」とんびりしたものだ。

「姉上、皆、姉上にお会いするとほつとすると申しております。わたくしも姉上の笑顔が大好きです」

「まあなんてお上手なこと。といひで、富中嫌いのあなたが、ビックリしてここへいらしたの?」  
のんびりしているようだが、これでなかなか侮れない。

「真亞姫様にお会いしたくて参りました」

加賀美は正直に答えた。

「兄上の差し金かと思つたわ。でも、よく真亞姫様のことを探して存知ね。継俊さまに聞いたのね」

「どうしてそれを……」

三の姫は扇で口を隠し、目を細めた。

「富中で噂になっています。継俊さまがある巫女に心が執心だとか。女房たちがどんなに文を遣わしても見向きもしないのに、巫女さまにはいつも文を遣わすと。ほほほほほほほほ」

加賀美は自分の顔が赤くなるのがわかつた。

「やはりあなたなのね。大丈夫よ、巫女というだけで皆はつきりしることは知らないから。でも、あなたがいらっしゃるとは余程のことがあります。宜しいわよ。わたくしが真亞姫に会わせてあげるわ」

特別、詳しい事情も聞かず、三の姫は自分のほうから引き受けた。ところが、まだ何も頼んではない。興味本位のようでもあった。富中の暮らしに退屈しているようであった。

「後で使いを部屋へやります。待つていなさい」

扇に隠された顔を想像しただけで気味が悪かつた。何を考えているのかわからない世界だ。

三の姫に言われるまま待つていると、御簾を潜つて几帳の影から  
継俊がそつと入つてくる。驚いて何か言おうとした加賀美を見て、  
自分の口に人差し指を立て、彼女の横に座つた。

「声を立ててはいけません、三の姫様には内緒です。よく、いらっしゃいましたね」

袖で口を隠し小声で囁く。

「継俊さま、姉上から聞きました。宮中で噂になつていると。困ります。兄上にでも知れたら面倒です。この上、宮中の花の宴で神楽など舞えません」

継俊は、必死に頼む加賀美のことなどをして気に留める様子もない。

「大丈夫ですよ。あなたの兄上にはわたしからお話致します。良いではありませんか、神楽を舞つて下さい。もう、お話は出来ております。いまさら止められませんよ。あなたの兄上もござ存知ですから」

「えっ？ 兄上もですか？」

「はい」

継俊の目が笑っていた。

加賀美の完敗である。すでに継俊の策の中にあつた。

「六の姫様、真亞姫様がお待ちでござります  
ちょうどやうぐ、三の姫の使いがやつてきた。御簾じにて使いは  
声をかける。

「六の姫様、真亞姫様がお待ちでござります

「わかりました、すぐに参ります」

加賀美は継俊をそこへ残し、部屋を出て行く。

使いの女房について行き、御簾を潜るとそこには真里姫がいた。たしかに美しい女性だ。やはり桜の季節を意識した桜色の着物を合させていた。黒い髪は豊かで艶やかだった。だが、どこか生気が欠けていた。

「初めてお目にかかります。光則の妹の六の姫、加賀美と申します」

「先日はお見舞い戴きありがとうございます」  
その声は今にも消えてしまいそうな、か細いものだった。

「お体はいかがですか？」

「……」

加賀美の問いには答えない。

やはり、どこか苦しそうで、すぐに  
「じめんなさい。あなたの番はわたくしにはさしつ過ぎるよ」つだわ」とだけ言つと別の部屋へ下がつていかれた。

加賀美はさきほど待つていた部屋へ戻ったが、継俊の姿ほもう無かつた。

その後、日が暮れるまで三の姫たちと番合わせをしたり、扇や貝などで遊び、夜は用意された自分の部屋へ戻った。加賀美は改めて宮中は好きになれないところだと思った。加賀美には窮屈である。

そして、夜になると継俊がやってきた。彼は懐に用意していた男物の帯を取り出し、几帳に掛ける。

「大丈夫、何もしないから。こうしておけば他の男は寄つてこないから」「涼しい顔で言う。

「ところで真亞姫さまはどうでしたか？」

加賀美は少し考えて答えた。

「あれは真亞姫さまではありません。心と身体がずれています」

「どういひ」とですか？」

どう説明すれば理解して貰えるか、少し考えて加賀美は答えた。

「肉体は真亞姫様です。でも魂は別人かと」

「そのようなことがあるのですか？」  
やはり継俊には不思議なようだ。

「たぶん呪術師によつて他人の魂と入れ替えられたのだと思います。以前、蓮が真亞姫様の屋敷に行き倒れになつた女を運んだ話をしましたが、その女の魂を真亞姫様の肉体にいれたのだと思います」

「では、真亞姫様の魂は何処へ行かれたのですか？」

継俊の問いに加賀美は複雑な顔をした。

「もう、この世には居られません。ただ、まだあの世にも行くことができずにつづいています。お会いしてそれを確かめたかったのです」

「では、どうすれば良いのですか？」

「どのみち、このままにしておいても肉体のほうが持ちません。ですが、真亞姫様には異様なまでの妖氣があります。このままでは周りの者のほうがその妖氣に犯されるでしょう。もし、帝が物の怪にとり憑かれたりなされば、国が混乱致します。もしかすると、狙いは帝かもしれません。帝は皇太后様のおっしゃる通りにはなさいませんし、背後の不二原氏も、それをこのまま見逃すとも思えません」

継俊は大きな溜息をついた。

「姫、あなたは恐ろしいことを考へる人だね。帝のお命を狙つていふなどと」

「今の真亞姫様は生きた人間ではありません。絶対にご懐妊などありません。それをこのまま帝がご寵愛し続ければ、帝のお命も危のうござります」

継俊は首を横に振つた。

「なんと恐ろしいことだ。真亞姫様を帝から遠ざけるよりほかあるまいが、今の帝がそのようなことをご承知なさる筈もない」

「わたくしが何とかいたします。術が解ければ、真亞姫様は本来のお

姿になりましょ」

「本来のお姿とは、まさか……お亡くなりになるとこいつですか？」

継俊は慎重に言葉発する。

「ええ、今度の花の宴で神楽を舞います、その折、術を解きましょう。わたくしの力だけでは解けません。神様のお力を借りましたましょ」

「……そうですか、それはあなたにしか出来ないことだね」

継俊はやさしく微笑んだ。それを見たとき加賀美は自分の胸の鼓動が高鳴るのを感じた。

いつも屋敷とは違い、几帳の向こうに渡りもいなかつた。

気まずい沈黙の後、継俊が口を開いた。

「姫、わたしに何か、魔除けになる物を授けてくれぬか。」

「……そうですわ、お持ちになれておいたほうが良いかもしてくれませんね」

加賀美は何の疑いもなく、懐から香り袋を取り出した。

「この中に鈴が入っています。これを魔除けにお持ち下さる」

継俊はその袋をゆっくりと手にし、握りしめた。

「ありがとうございます、これで安心だ。あなたの舞の成功を祈るよ。そして、帝をお救いしておくれ」

継俊の表情は何時に無く真剣だった。

「継俊さま、何かお考えがあつたのですか？」

加賀美は妙な不安にかられた。

「いや、そのようなことは無いよ。それより夜が更けてきた、わたしは帰るとしよう」

「帯を……」

加賀美が几帳に掛かった帯を取りついとすると、継俊はそれを制止した。

「そこに置いておこう。やうじておけば、あなたもわたしも安心し

て眠れるといつものだ

そう言い残すと、彼は誰にも気が付かれないよう、そつと出て行った。

そして、その夜は静かに更けていった。

翌日、宮中を出て加賀美は屋敷に戻った。三日後の花の宴までに神楽の稽古を行わなくてはならない。神楽とは本来、神に奉納する舞である。純白の古代の衣装に身を包み、雅楽に合わせ優雅に舞う。

加賀美はふと、継俊に鈴を渡した時の彼の態度が気に掛かった。何故、あのときあっさり鈴を渡したのか、あのとき感じた不安が戻ってくる。

「渡りはいますか？」

女房たちに聞くが加賀美が宮中から戻つてから、姿が見えないようだった。

渡りがないことで、一人きりになってしまったようでよけい、不安は増していった。

それから一日が経ち、ようやく加賀美の舞も一通りの形がついた。花の宴の前日の夜、最後の稽古をする。

その時、加賀美は体中に今まで感じたことのない漲る力を感じた。

何かに包まれ、自分の身体が浮いたようだった。

すると不思議なことに光輝く弓と矢が加賀美の手に現れる。

彼女の能力を結集したとき得られた、現在の彼女の最高の力だつ

た。

現実の物ではない光物だった。

これぞ神より「えられし力である、と加賀美は思った。

実はどうやって真亜姫を本来の姿に戻すのか、考えあぐねていた。

今の自分の力で、あの術が解けるか不安だったのだ。

継俊にあは言つたものの、見当がつかなかつたのである。

「弓」と矢であれば、真亜姫を救うことができるかも知れないと  
思つたとき、「あつ」と驚いた声が聞こえた。

「弓」の姿を見せなかつた、渡りだつた。

加賀美の手にある光物の弓矢を見て、驚いたようだつた。

「姫さま、美しい光で！」やいます

渡りは加賀美の前で跪く。

「それより渡り、何処へ行つていたのですか？」  
「田といふもの姿を見せずに、わたくしに何も告げずに、何処へ……」

そう言いかけて加賀美は言葉を詰まらせた。

「……継俊さまに何かあったのですか？　臥せつていらつしゃる…  
…ねえ、渡り！」

いつもは取り乱したりなどない加賀美のうろたえた様子に、渡り  
のほうが驚く。

混乱した渡りの意識が、加賀美の中に流れ込んだのだろう。

「申し訳ありません、継俊様とのお約束でした。姫さまには話して

はならぬと

「何処へ行つたのですか?」「…」  
加賀美の顔は青ざめていた。

「月の姫の屋敷へ行つて参りました。わたくしにその供をせよと、  
継俊様が申されて。それで、行つて参りました」

「わたくしがついて行くと申し上げたではありますか、それを如  
何して……勝手なことを……」

「継俊様は姫さまを連れて行くわけには参らぬと。考へてもみなさ  
い、女君に会うのに自分の思い人を連れて行く男君はいないよ、と  
おっしゃいました。それで、わたくしがお供させていただきました」

継俊は正しい。

女君を連れて求婚に行く男君はいない。

「……それで、魔除けが欲しいとおっしゃられたのですね。もう少  
し早く気付けば良かつた……それで、継俊さまのご容態はいかがな  
のです?」

「薬師の見立てでは、今日、明日が山だと。北山の僧侶ともお越し  
戴き、ご祈祷していただいております」

「継俊さまにお会いしたい……」

「姫、それは叶わぬことだと存知のはず、決して、行つてはなり  
ません」

継俊には正室がいる。通い婚の「」の時代、女君のまつから訪問するの、失礼だとされている。

暗黙の了解である。

ましてや正室でないならば、男君が通つて来るのを待つより他ない。

「どうしたら良いのです、お願ひ、渡り……」

加賀美はその場で泣き崩れる。

「姫さま、落ち着いて下さー。継俊様は予めこのよつた事態を想定されておられました。尚のこと、姫を巻き込んではならぬと。どのみち、最終的にはあの姫でなければ解決できないのだから、わたくしが様子を見てきてあげよう、と。この扇を姫に渡してくれ、とおっしゃつて、預かって参りました。月の姫から戴いたものであると言えば、わかると」

渡りは加賀美に扇を差し出す。

その扇には香が焚き染められ、広げると月夜が描かれ、かなり高価な物だった。

だが、その扇から妖氣は感じられなかつた。

「」のよつた物の為に、継俊さまのお品が……やはり継俊さまはどうかしておられる

「姫、継俊様はこうもおつしゃつておられました。とにかく、帝をお守りしなくてはならぬと。真里姫様のことが先だからと、とおつしゃられました」

少し加賀美は落ち着きを取り戻した。

「」のままでは帝のお命が危ない。

月の姫のことは後で考えるとして、ならば何故、今、継俊は動くのか、やはりとことん読めぬ男だ。

13（後書き）

次回、いよいよ花の宴です。

花の宴の当日、加賀美は渡りに馬の用意をさせた。通用門である都筑門に用意するよう命じた。真亞姫は加賀美の舞いが終わる前に、御所を出ようとする筈である。舞い終えた加賀美が真亞姫に追いつくには馬しかない。

夜になり、いよいよ花の宴が始まる。

松明が焚かれ、まるで昼間のようにその庭と舞台を明るくする。庭の桜はこのところの暖かい陽気に綻び、見ごろを迎えていた。花ははらはらと散り、松明の篝火に照らされ、その光景を幻想的にしていた。

管弦の音楽は闇を切り裂き、篝火と戯れるように流れる。若い公達が桜の舞いを舞う。貴族の姫や女房たちはその踊りに酔いしれる。

帝は御簾を少し上げ、真亞姫と共にその踊りを楽しんでおられる。それを、少し離れたところから、訝しそうに皇太后が眺めている。その目は鋭く篝火に映し出されていた。

ようやく公達の舞いも終わり、舞台では加賀美の舞いが始まった。純白の古代の衣装にみを包み、雅楽に合わせ優雅な動きを見せる。そこでは時間が止まり、澄んだ空気が流れる。清い水が流れるように雅楽が流れ、巫女鈴を手にした加賀美が舞う。

さつきまでの公達の華やかさとは違い、清楚な美しさだ。

ある者は扇で口を隠し啞然とし、またある者は袖で溢れ出る涙を押さえている。篝火が舞台を一層幻想的なものにし、その中に加賀美は溶け込むように舞う。

この世のものは思えない舞いで、恐れ多くも神の世界を垣間見るようであった。

その場にいる全ての者が見とれていて、帝でさえそうであった、只、一人を除いては。

やはり、真亞姫は正視できなかつた。

加賀美の舞いが始まると、その顔は蒼白となり、次第に苦痛で顔が歪んでいった。

舞いも終盤に差し掛かり、加賀美の手にはいつの間にか巫女鈴ではなく、光の弓と矢が握られていた。彼女はそれを舞いの中で、天に向かつて放つ。

光の矢は夜の闇を照らしながら天高く上り、見えなくなつたところで、弾けた。そして光の粒となり、人々の上に桜の花弁と共に散つた。

人々は天を仰ぎ見て、「わっ！」と歓声を上げる。  
天に向かつて手をかざし、皆、光を浴びる。

その中、苦しみに耐え切れず、真亞姫は一番上の衣を残して立ち上がり、その場から走り去つた。  
帝の制止も聞かなかつた。

加賀美はそのまま何も無かつたように舞いを舞う。  
笙の音が物悲しそうに響く。

漸く舞いが終わろうとした時、一人の女房が悲鳴を上げた。

「……きやあ、だれか……」

真亞姫が脱いでいった衣が次第にその様相を変え、黒いねばねばした物体へと变化したのだった。

それを見て、他の女房も腰を抜かし恐怖を隠しきれない。

その様子を見て加賀美は舞台から降り、黒い物体の上で巫女鈴を鳴らす。

不思議なことにその黒い物体からは白い煙が上がり、その煙は人の顔を形作った。ますます人々は驚き、這つて逃げる者までいる。「物の怪！」と至る所で叫び声が上がり、花の宴は騒然となつた。次第にその煙の顔ははつきりしないま消えていった。それと共に黒い物体も風に運ばれ無くなってしまった。

逃げ惑う人々の中を加賀美は都筑門へと向かう。  
真亞姫の術は思っていたよりも強いものだった。

もう既に、真亞姫は牛車を走らせ、宿下がりしていた屋敷へ戻っているはずだ。そこにはあの煙の主の呪術師がいる筈である。

都筑門へ行くとそこには渡りが馬を用意して待っていた。  
舞いの衣装のまま加賀美は馬に跨つた。  
渡りと共に夜の闇の中、馬を走らせる。さつきまで出ていた月は雲に隠れている。

「姫さま、いかがでしたか？ 隨分、騒がしい花の宴のよづでした  
が」

「すごい妖氣です。だいぶ真亞姫様の体は弱っています。ただその分、妖氣のほうが強くなっています。とにかく急ぎましょ」

一人とも馬に鞭を入れる。一喝嘶くと、馬はせつゝよつとの速度を上げ走る。

真亞姫の屋敷の前には一人の人影があった。  
一人を見て、加賀美は驚いたようだった。

「蓮、九、どうして此処にいるのですか？」

「そここの渡りが一人では心細いんだよ。それにおいらは、この屋敷には貸しがある」

蓮の相変わらずの減らず口だ。

「大丈夫ですか？ 怪我などされでは困ります」

「ふんつ、おめえ馬鹿じやねえのか？ 怪我なんてするわけねえだろー。この棒一本あれば、どんな大男でもイチコロよー。」

蓮は自分の背丈ほどもある樅の木の棒を自慢げに振り回した。

「兄貴にかかりや、その棒一本でみんなお陀仏よー。」  
と言つて九も鼻を鳴らす。

「一人ともお祭り騒ぎだ。

「まあ信じましょ」

加賀美は馬を降り、門を叩く。

しかし、当然のことながら誰も開けてはくれない。

「退きな」

蓮はそう言つと、九と二人で体当たりした。すると、門は意外なことにつき開いた。

蓮は肩に桺の木の棒を担ぎ、先に入つていく。

「蓮！ 危ない！」

渡りの声を聞く間も無く、蓮は襲ってきた男を力一杯、棒で打ちのめす。

「冗貴、やつぱり凄いぜ！！」

九は飛び上がらんばかりに、手を叩いて喜ぶ。

「渡り、こゝはおいらたちが引き受けた！ 姫を連れて奥へ行つてくれ！！」

次から次へ飛び掛つてくる男たちを、上手く打ちのめしながら蓮は言った。  
「わかつた、頼むぞ、蓮」

渡りはそう言つと加賀美の手首をぎゅっと掴み、奥の方へ導いて行く。

「こゝらです、この前、女房が入つていった部屋はこゝらです」

暗闇の中、奥へ入つていく。何も見えない。

「待つて、誰かいる！」

御簾の影から黒い影が現れると、その男は剣を振り回す。

「……姫！」

渡りは前へ出る。

短い剣を逆手に持ち、応戦する。

男の剣を持つ右手に斬りつける。男は手にしていた剣を落とし、右手首を押さえた。

「ああ、姫さま行きましょ」……

加賀美は先に行く渡りの後ろをついて行く。

「この部屋、妖氣がある」

そう言つと加賀美は渡りと共に横の部屋へ御簾を潜り、入つて行く。

そこには蒼白になり、髪を振り乱した真亞姫がいた。



14 (後書き)

真亞姫が最期のときを迎えます

渡りは身構える。

しかし、加賀美は身体の力を抜いていた。

「真亞姫様、何故このよつたことに……帝の寵愛を一身に受けて居られた姫が、どうして呪術師などに惑わされたのですか……」

加賀美は真亞姫を責めるつもりはなかつた。ただ、美しく心優しい姫が呪術師の罠に嵌つたことが、悔しかつた。

しかし、真亞姫はその問には答えなかつた。

足元にあつた香壺の箱を掴んで、加賀美に向かつて投げつけた。

渡りが加賀美を庇う。

箱が渡りの顔を掠め、渡りの頬から血が流れた。

血を見た真亞姫は、よけい逆上したのだろう、そのあたりにある物を手当たり次第に投げつけた。

「真亞姫様！ もうお止しになつて、どのみち逃げられはしない。これ以上、苦しむ必要はありません」

加賀美の目からは涙が流れていった。

しかし、その目はしっかりと真亞姫を見据え、手には光の弓と矢があつた。

真亞姫はそれを見て後ずさりをした。

だが、加賀美は真亞姫がうろたえたその瞬間を見逃しはしなかつた。

真亞姫の心臓めがけ光の矢は一直線に飛んだ。

真亞姫はその場に倒れる。

彼女の身体から白い煙が上がる、

それは形を成さず、次第に消えた。

加賀美は真亞姫に駆け寄り、彼女を抱き起こした。

「姫、しつかりなさつて！」

「…………ごめんなさい…………」

真亞姫は苦しみの中、搾り出すように声を出した。

「…………このような結果になつて、わたくしの欲です。わたくしのように身分の低い者が帝のご寵愛を受けるのは苦しかつた。せめて、身籠ればと思い……重利様にご相談致しました。重利様とは遠縁に当たります。そして、真部人麻呂という呪術師にご祈祷して戴きました……すると、ますます塞ぎがちになり、宿下がりを……」

「それからはわたくしが承知致しております。行き倒れの女の魂を術を使って入れたのですね」

真亞姫は小さく頷いた。

「真亞姫様、もうあなたは亡くなつて居られます。わたくしが巫女鈴を五回鳴らします。すると光が見える筈です。神の光に導かれてお行きなさい。もう、この世に執着してはなりません。光を追つて行けば、次第に浄化されます」

真亞姫はゆっくりと頷き、最後にこう言い残した。

「わたくしは……帝をお慕い申しておりました。帝は、孤独で寂しいお気持ちをお隠しになられて生きておいでです……皇太后様のご実家やその他の臣下の方々の狭間で……苦しい思いをなさつておいででした……皆、自分の利益しか考えぬと。だが、それも自分のせいなのではないかと……わたくしが、政の話はよくわかりません、と申し上ますと……だからあなたを心から愛せるのかもしれない帝とお別れすることだけが、辛うがざいます」

「……真亞姫様、大丈夫です。転生輪廻があるとするならば、神はきっとあなたと帝をもう一度会わせて下せらるます。神は一途に思うあなたに、お味方して下さいましょ」

それを聞き安心したように真亞姫は目を閉じる。

「わ、天に召されませ。そして帝をお守り下せ……」

加賀美は言い終えると、ゆっくりと静かに巫女鈴を五回鳴らした。真亞姫の目から大粒の涙が零れ落ちた。

それは真亞姫のこの世への挨拶だった。

加賀美は真亞姫の亡骸をそおつとその場に置き、手を合わせる。渡りもそ後ろで手を合わせた。

加賀美は散らかつた部屋の隅にあつた真亞姫の衣をその亡骸に被せた。

「渡り、奥の部屋へ行きましょ。呪術師はこの屋敷の何処かにまだいるはずです」

一人は闇の中を手探りで奥へと進む。

誰も出て来る様子は無い。

もうしばらく進むと御簾の奥から光が見えた。  
渡りは御簾を叩き落とす。

中には直衣姿に鳥帽子をつけた、歳は三十九歳であるうか、その男燭台の光に照らされ、不気味に笑っていた。

「おう姫、お初にお目にかかります。そつこ、いらっしゃいました」

ちょうどその時、蓮と九が追いついて来た。

「来たぜ……こいつは誰だい？」

蓮は水を得た魚のように生き生きしていた。

「ふつ、煩い奴がきましたね」

「何だと？　こいつが呪術師つてえ奴か？」

蓮は持っていた棒で男を指した。

真部人麻呂は人差し指を動かす。その動きに連動するように蓮の持っていた棒も動く。

生き物のようになつた棒は蓮の手から零れ落ちた。

「……蓮、下がりなさい！」

加賀美は「」を引いていた。蓮は思わず後ろへ下がる。

「何故あのようなことをした？」

加賀美のその声は、いつものか細い声ではなかつた。ピンと張られた琴の音のように闇の中を響き渡る。

「人とは愚かなものよ。欲を捨てきれぬ。すべてはその欲が成せる業、けつしてわたしが特別なことをしたわけではないのだよ。人は金や地位、権力、果ては人の心まで欲しがる、なんと貪欲な生き物か。欲の無い人間などおるまい」

「たしかに欲は誰にでもある。でも、それを利用するのは許されない。あなたは人間ではない。真亜姫は心から帝をお慕い申し上げていただけで、ご懷妊なさりたい、という気持ちは当たり前のことです。それを利用するなど、人間ではない……」

「何と良い響きだろう。あなたはわたしを人間でないと申された。わたしは人を超えたいと常々思っていたのだよ、ふつ、ふつと、ふつ」

男は不気味に笑った。

「絶対に許せない……」

加賀美は光の矢を放つ。

光の矢は見事に男の心臓を貫いた。

しかし、男の顔は苦痛に歪むことなく、笑ったまま顔だけが宙に浮き、グズグズと身体は崩れ落ちた。

「……ぎやつ、物の怪だ！…」

九は驚いてその場に崩れるように座り込んだ。

「勇敢な姫、またいつかお会い致しましょう」と声だけ残し顔は消えた。

それを見て蓮は加賀美の横に並んだ。

「……どういうことだい？」

「もともと術で出来た蜃氣楼のようなものだったのでしょうか。でも、どうこう事をしてくれたのか。真姫様のことを帝がどんなに嘆かれることが……」

闇の底を燭台の光がどんよりと[燐]し出す。  
現し世もやはつ夢か幻のよひであった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2405z/>

---

月語り - 花の章-

2012年1月12日18時51分発行